

不妊治療を受けている女性の経験世界

－Franklの苦悩の存在としての不妊－

五十嵐世津子

第1章. はじめに

「不妊」は、本人あるいはカップルが子どもを望まない限りは治療の対象とはならないし、また、子どもがいなくても夫婦二人の生命存続の危険性はない。しかし、自分たち夫婦間の子どもを望んでも叶えられない時、さらに、私的な生殖の部分に医療が介入によって惹起する身体的・精神的負担や苦しみは大きい。今日、生殖医療のありかたの是非や倫理的諸問題は、大いにマスコミなどでも取り上げられている。しかし、その治療を実際に受けた女性の苦しみや思いは、治療を受けた女性の手記として出版されてはいるものの、大方の不妊治療を受けている女性の思いは、個人的なこととしてあまり関心がもたれていないのが現状であろう。また、関心があったとしても、それは一部の医療の現場にいる関係者にすぎないであろう。

今回、不妊治療を受けている女性へのインタビューを通して、子どもを産みたいと望みながらも産めない女性が現実には置かれている体験を直接聴くことができた。この不妊治療を受けている女性の語りを解釈することによって、今現在経験している世界観が明らかになった。子どもを望みながらも叶えられない女性が、いかに今の不妊という状況に意味付けを行うことができるのか、人生の意味の捉え方についてFranklの「苦悩の存在」という視点から考察する。

第2章. 不妊女性の語り

Franklは、人間を「苦悩」に意味のある存在という観点で見つめている。子どもがほしいと願いながらも子どもが授からない夫婦、特に妻に焦点をあてて考えると、この状況は、「苦悩」の状況であることは、彼女たちの語りから、実感として第三者に伝わってくる。しかし、その語りの中にはどのようなことが内在しているのかは明らかにされていない。さらに、この状況を何とか打開しようとした時、自分の意志や努力だけでもなんとも致しがたいことに気づかされる。それ故にそこに苦悩が生じると思われる。ここではまず、子どものいない現状をどのように経験し認識しているのかを、明らかにすることである。つぎに、その経験の背後にある苦悩の意味について考える。これについて、現在一般不妊治療を受けている4人の女性のインタビューをもとに考えてみた。インタビューの対象となった女性たちは、年齢が30歳から35歳で、婦人科クリニックで一般不妊治療を受けていた。年齢、結婚年数、治療開始に至るまでの期間、治療期間、現在の治療内容、妊娠歴等

については、表に示す通りである。女性たちへは、インタビュー開始前に、「今の不妊治療をおこなっている現状について、教えて欲しい」と依頼した。

インタビューを通し、女性が語った語りを分析していくと、その内容には、各個人に、あるいは4人の女性共通に話題となる「テーマ」が浮かぶ上がってきた。以下では、テーマ毎に中心となる語りを述べる。

表. 4人の女性の背景

	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん
年 齢	30才	30才	35才	35才
結 婚 年 齢	28才	27才	32才	22才
職 業 の 有 無	保 母	准看護婦	主 婦	主 婦
現 在 の 治 療	人工授精	パーロデル内服	人工授精	排卵誘発剤
妊 娠 歴	無	無	有	有
出産の目標年齢	35才		40才	38才
受診経験の有無	有	無	有	有
同 居 者	夫のみ	夫のみ	夫のみ	夫のみ
子どもを産みたいと思った時期	結婚後2年ぐら いしてから	結婚して2,3年 経ってからでい い	結婚してすぐに 欲しいと思った	結婚して最初の 頃はいいと思っ ていた

テーマ1：「なぜ、自分なのか」

不妊の原因を理解しながら治療を受けているにもかかわらず、なぜだろうと、なぜ妊娠しないのか、なぜ自分が不妊なのかと、医学的な診断とは別に自問している。

4人のなかで、治療経過の短いBさんを除き、他の3人の女性が「そうなればそうなったって、やっぱり今度は、自分の、何でだろうと……」（Aさん）、「あとから結婚したのに子どもができる。どうして私だけがと思う」（Cさん）、「どうして、できないんだろう、何で自分だけと思う」（Dさん）と言う。

「自分の、何で」「どうして、私だけ」、「何で自分だけ」と、子どもができないことに対して、自分を責め、なぜなのかと自問する。そして、「一人で出来ない」「先生の手助けが必要」「行かなきゃ出来ないんだし」と、本来、個人的な生殖に医療が介入することを仕方がないことと受け入れている。

テーマ2：「他者からの圧力感」

どの女性も、最も身近な親、身内・親戚、友だち、職場の人間から「子どもまだ」「作らないの」「早いほうがいいよ」という言葉や態度によって、産めという圧力を受けとつ

ている。

親からの言葉として、「向こうのお母さんにもまだなのと言われる」(Aさん)、「家の人
は、結婚してすぐにもしゃべっていった」(Bさん)、「一年前で病院に行くまでは、まだ
かまだかと言っていた。」「主人の両親は、……いとこの子どもの、赤ちゃんの写真をたく
さん飾っている。」(Cさん)、「私たちがずっといなかったの、そんな親の姿を見たとき、係
でできればこうなんだな、と思う。明るいし、楽しいみたいだし、いたほうがやっぱりいい
んだなーって思った時もあったけど」(Dさん)と言う。

また、Dさんは、「(兄嫁に) 仕事やめだのと言ったら、子どももいなくせに仕事やめ
て、と言っているのが聞こえて」「仕事もしないでただ家さいで、思うでしょ……」「仕事
はしていね、子どもはいない、何もないと思って」と話す。この状況について、自分と比
較したときに、兄嫁は家事を切り盛りしながら子どもを産み子育てをし、その合間に仕事
をこなしている女性であると表現している。一方自分は子どもも産めない、子育てもして
いない、おまけに、人間関係がもとで仕事を辞めた。今の自分を「何もない」と表現して
いる。

テーマ3:「外された感じ」

Cさんは、結婚後、アパートに新居を構えた。これと相前後して3世帯が新婚で入居し
たと言う。そして、「とうとう家だけになった。新婚で入って、……子どもがいないときは、
仲良く挨拶していた。私は外された感じ。つらいものがある。子どもがいる人同士で行き
来をして仲良くなっている。私にも子どもがいれば仲間に入れてもらえるのに。あーあとな
る」と言う。結婚4年が過ぎ、アパートの他の住人たちには、それぞれに子どもが産ま
れた。一つの小さな社会が存在したと語る。同じような時期に結婚し、Cさんを除く3世
帯に子どもが産まれたことで、4世帯の付き合い方が変化したことを述べている。その中で、
Cさんは自分だけが外されたという思いを抱く。その思いをなんと表現していいのかCさ
ん自身も言葉が見つからず、「あーあ」と言う。自分たち夫婦にだけ子どもがいないとい
うことの「負い目」や、「取り残された思い」が「あーあ」という言葉になって出てくる。
「外された」という思いは、単に母親になっていないという意味だけではなく、同じ「女
性」としても外されたという思いの一表現であると言えよう。

テーマ4:「夫の気持ちを察する」

4人の女性とも、子どもを持つということに関して、夫がどのように考えているか、あ
まり話し合われていなかった。夫との会話の中で、「子どもが欲しい」という直接的な言
葉ではなく、「欲しいと思う」という女性の側から、夫の気持ちを察した表現で語られて
いる。例えば、「(病院に) 行く前にもそろそろ欲しいなと思っていても、むこう(夫)な
んも別に分かっているんだかいけないんだか、別に病院に行くまえのことで、つくるもつく
らないも、欲しいんだか欲しくないんだかはっきりしなくて」(Bさん)、「主人は(病院
に)行きたければ行ってもいい。負担は女性にあるから、無理には行きなさいと言えないっ

て、本人は子どもが欲しいと思う」(Cさん), 「(夫が) 40すぎの人で子どもが生まれたよ
ううれしそうに言うこともあるので、やっぱり欲しいんだなと思う。いまのところ協力し
てくれるので、欲しいんだろうなと思う」(Dさん) と言う。

Cさん, Dさんは, 夫の思いを察し, 「やっぱり欲しいんだ」「欲しいと思う」と捉え,
Bさんは, 夫の様子から「はっきりしなくて」と歯がゆい思いをしている。Dさんは, 夫
の同僚に子どもが産まれたのを, 嬉しそうに話す様子に, 夫が「かわいそう」と語る。自
分以外の女性と結婚をすれば, 夫は自分の子どもをもつ可能性があるからと, 離婚を考え
たこともあったと言う。

テーマ5:「揺れる思い」

4人の女性は, 子どもを持つために不妊治療を受けている。Aさん, Cさんは, 「一人
でいいから欲しい」と話している。他方, 子どもが欲しいという思いと, なぜ欲しいのか
分からないという思いの中で, 揺れている女性もいた。「私, 自分自身で今わからないと
こがあって, 子ども本当に欲しいのか, ……30前後のあたり子どもがすごく欲しくて, ……
いま, なんか落ち着いているのかわからないけれど, あまり欲しい欲しいと思わなくなっ
た。」(Dさん), 「何が何でも欲しいかなー。んー。なにがなんでも欲しいはんで, 病院さ
行ってるんだべが, ……まあ, べつにこのままでできなければできないでいいし, ……」

(Bさん), 治療歴の短いBさんは, どうしても欲しいわけでないとして最初語っていた。さ
らに, 治療歴の長いDさんは, 本当に自分が子どもを望んでいるのか分からなくなったと
語っている。このように, 同一の女性自身の中にも「なにがなんでも欲しい気持ち」と
「このままでいい」との思いの中で, 相反した感情が入り交じっているのが理解される。
その両極端な状態を揺れているのが伺われる。

テーマ6:「あせる, 落ち込む」

不妊治療を受けながら, 4人の女性たちは, 生理になるたびにあせったり, 落ち込んだ
りしていることを話す。「私, それまではすごく落ち込んでいた。1回目, 2回目, 3回目,
あー4回目もだめ。あー5回目もだめという感じで。そしたらやっぱり5, 6回目のあた
りにI先生がね, もうひとり9回目でやっとできた人がいる。あーじゃあ, あまり落ち込む
こともないのかなと思えて, ……」さらに, 「前, 落ち込んでいたのは, 生理, 来た時, そ
のときにガックとくる。わたしの場合, やっぱり基礎体温つけていても, 生理の前に, お
腹や腰がにやにやしてくるから, 人工授精してても, 今回はどうかなと希望持ってたのが,
高温になって, 生理近くなりそうな時に, もうお腹ニヤニヤするから, 今回もだめかな,
でもどっかで希望をもってで, 生理やっぱり, 生理来たと思う瞬間にあー来たと落ち込む,
……生理が来るたびに落ちこんでいた。」(Aさん) と語る。Aさんは, 人工授精を10回行っ
た経過を振り返り, 生理の日が近づくにつれて, 身体でその前兆を感じ, 今回も治療が失
敗したと感じると言う。生理になることを認めたくない一方で, どっかで今回も失敗と身
体で感じるため, 実際に生理になったときの落胆は大きく, 生理のたびに落ち込んでいた

と話す。

また、Cさんは1年間ホルモン治療を行ってきた。これについて、「昨年9月から1年間、ホルモン治療で内服治療を行ってきたの。注射は3月まで。あせった。人工授精をお願いした。なかなかできないために。」と語り、妊娠しないことに焦りを感じている。Cさんの焦りは、35歳という年齢的な焦りもある。さらにDさんも、「やっぱり、今の治療だけど、やっぱり飲んでいると効かなくなるのかどうかわからないけど、効果がなくなって、……、そんなんで、そのとき落ち込んで、もう病院にいがねと思って、子どもいなくてもいいじゃあと思って」と、治療に反応しなくなる自分の身体に落ち込んでいた。

Cさん、Dさんは、排卵を誘発する治療を行っているが、しばらくすると薬に反応しなくなる自分の身体に落ち込んでいる。そして、半ば諦めながらも、あとの半分は諦められずに、治療をしばらく休んだ経験を語る。

テーマ7:「ためらう」

Aさん、Cさん、Dさんは、医師から次の治療にステップアップすることを進められたときの思いをそれぞれに語っている。3人とも共通して言えることは、薬物による治療に対し抵抗感を持つことは少ないが、人工授精や体外受精を医師から勧められると、とまどう気持ちや、幾分の抵抗感があることを語る。理由として、自分だけの判断だけでは行えないこと、夫の協力を得なければいけないこと、さらに経済的な負担、仕事の調整などが治療を受けることに影響してくると述べる。

Aさんは、人工授精をすでに10回近く受けている。最近、医師から体外受精という治療法について説明を受けた。そして、初めて人工授精を勧められた時と比較している。「人工授精はやりたくないとは思わなかった。ただどういうものかなと、分からなかったんで、ちょっとはあーと、思ったんですけど、でもI先生の所でもできる。」しかし、次の段階の体外受精については、「ただ今は体外受精は考えられないって感じで、2年ぐらいたった時に、どうしてもその時にまだ出来ていなかったら、そのときに考えたいな。……なんかそこまでやるかどうかと言うことで、まだそれまでは……。」と言う。

Dさんは、現在、排卵誘発剤を用いて治療している。医師から人工授精について説明されたが、受け入れることができずにいた。「それで3ヶ月前ぐらいから、人工授精の話も先生してくれて、費用も思ったほどかからなくて、もっとかかるのかと思っていた。体外受精と人工授精は違うからと。全然そういうのも認識がなかったから。値段も、もちろん気になっていたし、怖いものもあるし、どういう風にやるのか怖いし、痛みもあるんでないか、……」。そして、夫との話し合いの結果、もう少しこのままの治療を続けたいと結論を出した。さらに、「体外受精が考えられないのは、やっぱり聞き慣れないし、不安なこと。それで、もしできなかったら、と心配しているのかもしれない。」と言う。

加えて、Aさんは体外受精に関するテレビ番組をみて、「重い不妊状態」と感じたと言う。自分の治療がステップアップすることで、身体的にも精神的にもどれくらい耐えられるのか自信がなく、また、経済的な負担が大きいことを心配していた。Dさんは、あくまでも、

自然な妊娠を望み、体外受精は最終的な治療法と考えている。そして、この最終的な治療を行ってでも、子どもができなかった時のことを恐れているとも言える。

テーマ8：「頑張る」

Aさん、Cさん、Dさんは、不妊治療の限界を語っていた。しかし、「35までは何とか頑張っていきたい。どこかでやっぱり35歳くらいまでは人工授精か、普通に、とにかくいまの状態を保って頑張っていきたいな」(Aさん)、「だいたい40歳を目途にしている。子供にとって、年をとった両親になる。体力的にも無理。40歳まで精神的に元気があれば、40歳までは頑張ろうかなと思っている。」(Cさん)、「産むとしても38歳までだろうな。あと3年くらいあるから、もうちょっと頑張ろうって、頑張ってみようかな。……子どもを産む年を考えて、いま、現在はそのくらいと漠然と思っているけど、その時になって、40歳までと思うかも知れない」(Dさん)ことを語っていた。

このように女性たちは、産むとしても、あるいは治療を続けるとしても38,40歳までと、治療を受ける年齢に区切りを決めて「頑張る」と語る。その理由は、女性の身体にも妊娠・出産に適する時期があるということ、さらに子どもを産み育てるためには体力が必要であること、親が高齢であることは子どもにとってもかわいそうであるとしている。そして、このような主體的な判断をしながらも、40歳になったらあきらめきれずに、そのまま治療を続けるかもしれないと言う。

テーマ9：「子どものいない生活」

子どものいる生活を希望する一方で、女性たちは「子どものいない生活」をそれぞれに念頭にいれて治療を受けている現状を語った。「子どもどうしても出来ないって感じで、出来なければできないで夫婦でねうまく楽しくやっている人もいっぱいいるからね。それはそれで違った意味での生き方だしね。どうしても子ども出来ないと思ったときに、そこからのね、旦那さんとの二人関係が出来ていくと思う」(Aさん)、「子どもいなくても、二人だけで暮らしている人もいるし、自分だけにかぎらず、ここ最近そういうの多くなってきたのかな？……そういう人も結構いると思うんで」(Bさん)、「わたしは、……夫婦の仲も大切。子どもいなくてもこれから先、生きていく人もいる」(Dさん)と、夫婦二人だけで生活を再構築していく準備を行うことの大切さを話す。さらに、Cさんは、「もし、本当にできなかったら、動物を飼おうかなと思っている。主人も賛成している。2人とも犬が好き。アパートなので今は飼えない。」と、動物を育てることで「子どものいない生活」を受け入れる準備をしていると言えよう。

第3章. 考 察

ここでインタビューに答えた人たちは、特別な女性たちではなく、ごく普通の日常生活を過ごしている女性たちである。インタビューの中で、何を語ったかについて分析していくと、「なぜ、自分なのか」「他者からの圧力」「外された感じ」「夫の気持ちを察する」「揺

れる思い」「あせる、落ち込む」「ためらう」「頑張る」「子どものいない生活」の9つのテーマを中心に語られた。これらを、その女性の置かれている状況に立ち返って考えた時、この9つのテーマの内容から浮かび上がってくるものは、次の5つの言葉に集約されるのではないかと考える。

まず第一は、「**不本意**」ということ。つまり、これは「なぜ、自分なのか」という問いからはじまる（テーマ1）。ここから「不妊」に出会う。ここでの女性たちは、先に述べたように、普通に結婚し、子どもを産むことを望んだ人たちである。当たり前子どもを望んでいるにも関わらず、叶えられない「不本意」な思いを語る。

第二に、周囲の期待に応えられない「**自責**」。4人の女性が、自分の親、夫の親、身内、その他職場の人々から、子どもを産むことを言葉で強いられている。「子どもまだなの」「出来ないんでなくて作らないんでしょ」「作らないんでなくてできないんでしょ」「作らないの」（テーマ2）というような言葉を、周囲から無責任に、あるいは安易に浴びせられる。女性たちは、これらの言葉には悪気がなく、軽い気持ちで話していると理解しているものの、暗にこの言葉から、結婚したら子どもは産むもの、産まれるものというメッセージを受け取っている。また、夫の両親が、親戚に産まれた赤ん坊の写真を飾っているのをみて孫という存在を欲しがっている気持ちや、弟夫婦に子どもが産まれ、両親が喜ぶその様子に、やっぱり子どもを産むことを期待されていると感じ取っている。

さらには、根本的になぜ子どもが欲しいのかという夫婦間の話し合いがないままに、夫の言動からその思いを推し計り（テーマ4）、夫の望みを叶えてあげようとしている。このような社会や家族や夫らの思いに、必死で応えようとするが、それに応えられないという「**自責**」を語っていると言える。

第三に、女性としての「**疎外感**」。ある一人の女性は、同じ時期に新婚でアパートに入居し4年経った現在、自分だけに子どもがいない状況を語る。自分以外の母となった女性たちは、子どもを橋渡しにして人間関係を築いていると言う。母親たちの輪から一人外された（テーマ3）という「**疎外感**」を語っていた。

第四に、自分や治療に対しての「**焦燥感**」。このインタビューに応えた人たちは、すべて子どもが欲しいという目的で、自分の意志によって治療を受けていた。しかし、「何が何でも欲しいという気持ち」と「このままでいい」という相反した気持ちの中で「揺れている」（テーマ5）のが理解される。さらに、頻回に人工授精を行っても妊娠しないことに「何でだろうと落ち込む」（テーマ6）。同時に、自分の身体にやるせなさや怒りなど、さまざまな感情が「**焦燥感**」として表出されている。

第五に、子どもがいない人生を引き受ける決断「**諦念**」。4人中3人の女性が、子どものいない生活を考え、夫と二人のこれからの生活について、「出来なければできないで夫婦でねうまく楽しくやっている人もいっぱいいるからね」「本当にできなかつたら、動物を飼おうかなと思っている。主人も賛成している」と語り、自分たちの生活を子どものいない家族として構築（テーマ9）しようとする意識がある。

このように、絶対に子どもが欲しいという一方で、このままでいいと考えることができ

るようになることは、不妊治療から解放されることを意味する。しかし反面、子どもを一生涯持つことができないかもしれないという状況を同時に引き受ける「諦念」を語っていることを意味する。

人間の存在についてFranklは、

『人間存在はそのもっとも深いところでは、また究極的には、受難（passion）であるということであり、またそれが人間の本質であること、つまり苦悩する者、ホモ・パティエンス（Homo Patience）である。』¹⁾と述べている。

このFranklの言葉から、人間にとっての苦悩は、人間の本質であり、この苦悩の中に人間として生きる意味が見いだせると解釈できる。子どもを産むことを希望しながら、それが叶えられない女性の語りから最終的に抽出されたものは、「不本意」「自責」「疎外感」「焦燥感」「諦念」の経験世界であったと言えよう。

さらに、Franklは苦悩の意味の問いについて、以下のように語る。

『苦悩の意味への問いは人生への問いにほかならない。このような問いがまったくのところ解けないものであるかぎり、その問いに「コペルニクス的転向」を与えなければならない。同時にわたしたちは、問うわたしたちではなく、答えなければならないわたしたちが存在すること。また人生そのものが一つの問いであること、つまり、わたしたちが自分の人生に責任をとることによってのみ答えることができる問いであることに気づく』²⁾とある。人生そのものが一つの問いであり、それに答えなければならない自分が存在する。また自分の人生に責任をとる存在であると言う。そして苦悩の意味を問うことは、人生の意味を問うことであると説く。これは、「どうして私だけ、何で自分だけが」という「不本意」、周囲の期待に応えることができない「自責」、あるいは、不妊による「疎外感」、「焦燥感」、子どもをもつことを諦める「諦念」とあるという状況を問うのではなく、同時にそれに答えていかなければなければならない自分が存在するということを意味している。現在では、不妊を医学的な原因に置きかえることは容易であろう。だが反面、不妊治療によって子どもを持つことができるかもしれないという思いが、逆に子どもがいない家族の再構築を遅らせていることも考えられる。また、子どもを持ちにくい状況を認めがたくしていることもあろう。しかしながら、まず第一に、自分自身が不妊であることで、自分に何が問われているのかを考え、それに意味づけや価値づけを行う必要があると言えるのではないだろうか。この場合、Franklが言うところの「態度価値」に、どのように答えるかということが重要になってくると言えよう。Franklは、創造的価値、体験価値、態度価値の3つの価値について説いている。そのうちの「態度価値」について、以下のように述べている。

『かくして一見したところ現実に創造価値ならびに体験価値に極めて貧しい存在ですらも、なお価値を実現すべき最後のしかも偉大な機会をもっているのである。この価値をわれわれは態度価値とよびたいと思う。なぜならば人間が変えることのできない運命に対していかなる態度をとるか、ということがの場合問題であるからである。従ってかかる価値を実

現化する可能性は一人の人間が運命に対して、それを受取るよりはか仕方がないような場面において生じているのである。』³⁾

「態度価値」は、自分の意志では変えようのない運命に対する自分の態度であるという。ここでの4人の女性は、ごく普通に結婚し、子どもを産むことを希望した。しかし、子どもを持つとした時に、はじめてそれが困難であることに直面した。突然に不妊に直面したと言えよう。女性たちはこの状況に「なぜ、自分なのか」と問いかけている。この時に、どのような「態度価値」をとることができるのかで、なにが苦悩となっているのか、あるいは自分のおかれている状況を理解し認識することも異なってくると思われる。

子どもを持ちたいという女性にとって、不妊であることは苦悩である。現代の不妊治療によって、多くの女性が子どもを得ることは可能であったとしても、一旦は、不妊であるという現実を引き受ける必要があることを意味している。なぜなら、身体的な原因だけが明らかになったとしても、それを実際に引き受けているのは本人である。「今の自分の状況は何なんだ」という問いかけには、誰も答えを出すことはできない。だからこそ、子どものできない状況に対して、「なぜ、わたしなの……」と問いかけるのではなく、「子どものいない現在の私のこの状況の意味は何なのか、何が自分に課せられているのか」という逆の問いかけをする「態度価値」をとることが必要であると考える。この問いに対して、いかに自身が向きあったかに意味があると思う。問い方は個々の人によって異なるであろう。しかし、これによって、苦悩を引き受け、自分に課せられた運命を受け入れながら、自分の生き方を選択していくことができると言えよう。つまりは、不妊を悩むことを通して、主体的な生き方をする出発点となるであろう。それによって、不妊の苦悩は、単なる苦悩ではなく、一つの本来的な出発となる。そのままの私でよいということを自分で認めること。その自覚の上で、子どもを持つ、持たない、治療をする、しないと、主体的に決定することができるようになるのではないかと思う。

さらに、今の不妊という現状に抵抗しながら治療をするのではなく、置かれている状況について、自分のこととして引き受け認めことによって、「私に与えられたこと」として、今の現状を肯定することができるのではないだろうか。自分に与えられた生き方として前向きになることが可能になるであろう。そうすることによって、何に苦悩しているのか、つまり人間の繋がりの中で存在しているありかた、また、時間性の中の自分のありかたに苦悩していると自覚したときに、不妊を通して自分の生き方が見えてくるのかもしれない。

最後に、Franklは、生命の意味として、次のような文を残している。

『その唯一の意味が子孫を残すことの中に存する生命はそれ自身として無意味になるという逆説に到達するのである。反対に生命が子孫を残すことは、すでに生命がそれ自身ある有意味なものを示しているときに初めて意味をもつのである。したがって母となることの中にのみ女性の生命の究極の意味を専らみる者は、現実には子供の無い女性の生命から意味を取り去るのではなくて、まさに母になった女性の生命から意味を取り去るのである。したがって子孫のないことは一人の重要な人間の実存を無意義にはなしえないのである。』⁴⁾

このように、人間の生命の意味は、子どもを産み育てるそのことに目的としてあるのではなく、自分の生命をどのように輝かせて生き抜いたかということであろう。たとえ、結果として子どもに恵まれなかったとしても、後に振り返った時に、価値のある、意味のある体験だったと思えることが大切なのではないかと思う。

第4章. おわりに

最後に、不妊のカップルは、10組に1組の割合で存在すると言われるが、一般不妊治療、高度生殖医療を含めて、現在どのくらいの女性たちが治療を受けているのかは不明である。ここでは、4人の不妊女性の語りを通して、彼女たちが現実を経験している苦悩について記述した。彼女たちから発せられるひと言ひと言が、重みを帯びて聴く者の心に直接響いてくる。不妊であることに対して社会の認識がいかに変化しようと、今、不妊であることを体験している苦悩は変わらないであろう。これらの語りは、単に個々の女性が持っている苦悩ではなく、子どもを欲しいと願いながらも叶えられない女性たちが、それぞれに抱えているものと受け取れよう。不妊治療を受けて、自分たちの血を分けた子どもを得ることは大変意味深いと考える。しかし、後に、子どもを持つために努力した日々を無駄に過ごしたという思いを持つことがあるとすれば、それは非常に酷なことである。この体験を、意味のあるものとして思えることが大切なのではないかと考える。

本研究は、平成13年度に開催された弘前哲学会において発表した内容を加筆、修正したものである。

文 献

- 1) Frankl, 真行寺功訳:苦悩の存在論 ニヒリズムの根本問題. 121-122, 新泉社, 2000
- 2) Frankl, 真行寺功訳:苦悩の存在論 ニヒリズムの根本問題. 206-207, 新泉社, 2000
- 3) Frankl, 霜山徳爾訳:死と愛 実存分析入門 フランクル著作集2. 53, みすず書房, 1981.
- 4) Frankl, 霜山徳爾訳:死と愛 実存分析入門 フランクル著作集2. 80-82, みすず書房, 1981.

謝 辞

インタビューに快くご協力くださいました方々に深く感謝します。また、弘前大学人文学部の五十嵐靖彦教授はじめの諸先生からご指導・ご教鞭をいただきました。ありがとうございました。